

掲載コンテンツのご紹介

平成 20 年度に全国から応募されました地域文化資産映像を、審査委員会にて分野別・地域別を考慮し厳正なる審査を行いました結果、21 本の地域映像が選定されました。

以下に 21 本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。

(平成 21 年 3 月 31 日までに合併予定の市町村については合併後の市町村名を記載しています)



福島県 須賀川市 (旧長沼町) 八雲神社の「神輿渡御祭」と榊衝神社の「太鼓獅子」

須賀川市長沼地区 (旧岩瀬郡長沼町) には、特徴のある二つの民族芸能があります。一つは木之崎 (キノサキ) 八雲神社の本祭りで行われる神輿渡御 (ミコシトギョ) で、旧暦の閏年の 7 月第 2 日曜日 (本祭り) の前日行われます。この民俗芸能の特徴は、神輿渡御の先駆けとなって行われるダシフリと呼ばれる獅子神楽で、艶やかな衣装に身を包んだ子どもが軍配を持って獅子を操る姿は勇壮です。木之崎地区内 8 箇所舞の舞い場を廻って演じられます。

もう一つは、旧暦の閏年の 10 月 1 日に行われる榊衝神社祭礼の本祭りで行われる太鼓獅子 (タイゴジシ) です。この民俗芸能は、艶やかな衣装を身にまとった子どもたちが奏する大鼓の曲打ちにつれ、百足獅子 (ムカデジシ) と呼ばれる技楽 (ギガク) を思わせる古風な動きで舞進む獅子神楽を特徴とします。本祭り前日の晩 (宵祭り 9 月 30 日) に本殿から御飯屋に移されたご神体が本殿に戻る神輿渡御の行列について、およそ 4 時間かけてゆっくりと舞進みます。



茨城県 常陸太田市 西金砂神社 磯出大祭礼

西金砂神社 (ニシカナサジンジャ) の祭礼 (サイレイ) は、72 年に一度行われます。これまでに 16 回の祭礼が行われ今年が 17 回目となります。約 1200 年続いている神事 (シンジ) です。祭神 (サイジン) の大己貴命 (オオナムチノミコト) が鮑 (アワビ) の船で日立 (ヒタチ) の水木浜 (ミズキハマ) に到着された故事に基づき、西金砂神社から、水木浜までの往復 75Km を 7 日間掛て歩き、先々で神事、田楽 (デンガク) が催される大きな祭りです。行列は、猿田彦 (サルタヒコ)、田楽師 (デンガクシ)、稚児 (チゴ)、青土 (セイシ)、下り葉 (サガリハ) (お囃子) 氏子総代、山越え神輿 (ヤマゴエミコシ)、大神輿 (オオミコシ)、神職の順で、総勢は 530 人にも上ります。この大行列は、神の品位を高め、社会の安定と人々の平和を祈願するものといわれています。



茨城県 常陸太田市 東金砂神社 磯出大祭礼

72 年に一度行われる、東金砂神社 (ヒガシカナサジンジャ) の大祭礼の行列を収録した映像です。今回は 17 回目となりますが、これまでの 16 回、1000 年あまりに亘って、一度も中止は無かったとのこと。総勢 500 名余の行列は、猿田彦 (サルタヒコ) を先頭に延々と 1Km 続きます。6 泊 7 日かけて、日立市水木浜 (ミズキハマ) までの往復の間、所々に設けられた祭場では、神事と田楽が行われます。行列は、西金砂神社とよく似ていますが、行列の衣装、各種の神旗 (シンキ)、天童子 (テンドウシ)、大田楽 (オオデンガク) の演目など、多少の相違が見られます。7 日間を通して観客は延べ 100 万人といわれ、各地域を廻ることでその地域の平安と人々の安寧を祈る大祭です。



長野県 麻績村 市野川神社 太々神楽

市野川神社宝物 (ホウモツ) 太々神楽は、その起源は定かではないが、弘化四年に神楽御輿を再調した記録があることから少なくとも 200 年の歴史があり、同神社の秋の祭典に奉納されています。この無形文化財は、現在市野川地区全約 60 戸が参加する「聖民芸保存会 (ヒジリミンゲイホソンカイ)」によって保存継承されています。演目は、幌獅子 (ホロジシ) と御幣獅子の舞 (ゴヘイジシノマイ)、玉獅子の舞 (タマジシノマイ)、狂い獅子の舞 (クワイジシノマイ)、三面の舞 (サンメンノマイ)、内喜の舞 (ナイキノマイ)、鳥刺しの舞 (トリサシノマイ) の 6 つが継承されています。



東京都 新島村 新島村 若郷の大踊り

太平洋に浮かぶ新島、その北西に若郷集落があります。平成 20 年には、戸数 138 戸、人口 380 人の人々が暮らす集落です。ここでは、古くから「大踊り」が伝えられており、毎年お盆の 14 日に演じられます。「大踊り」は、寺踊り (テラオドリ) と役所踊り (ヤクショオドリ) に分けられ、演目は全部で 9 曲となっていますが、現在公開している唄と踊りは「青が丸 (アオガマル)」「備前踊 (ビゼンオドリ)」「伊勢踊 (イセオドリ)」の 3 種です。歌詞に特徴があり、古くは室町時代の「風流踊 (フリュウオドリ)」から、採ったものといわれています。この踊りには、お囃子は一切無く、全て肉声の唄のみで、踊りと調子を合わせ演じられます。江戸・寛政 12 年頃から「大踊り」は、先祖を供養するための供養踊 (クヨウオドリ) として踊られたため新島のみに残ったといわれています。また、人々の助け合い「もやい」の精神を養い、また個人の習い覚えた唄や踊りを演ずる楽しみがあるといわれています。



広島県 呉市(旧豊町) 秋祭り ~久比地区~

毎年10月の第1土曜日に、久比地区の総鎮守である篠原神社(シノハラジンジャ)の秋季大祭が行われます。地区の人々がこぞって参加し、祭りを盛り上げます。まず神社で「秋季大祭神事(シュウキタイサイシンジ)」が行われ、小学生の巫女による「浦安の舞(ウラスノマイ)」が舞われます。続いて、「氏子祭り」が行われます。その年に生まれた子供が初参りに訪れ、氏子の仲間入りする行事です。東西の総代宅から、担ぎ手たちが神社に向かう「門出(カドイデ)」は、伊勢音頭を歌いながら練り歩きます。担ぎ手が神社に到着し、「宮出し(ミヤダシ)」神事が行われ、「子供御輿(コドモミコシ)」「女御輿(オンナミコシ)」「大人御輿(オトナミコシ)」の順に境内へと引き出されます。その間境内では、獅子舞や笛や太鼓で祭りを盛り上げます。祭りの中心となる町内への練り出しが行われ、家々を廻り、もてなしを受けます。夕方、御輿を「お旅所」に安置し、神事を行い、再び櫓が町内へ練り出します。「宮入れ(ミヤイレ)」では、大人御輿は境内になかなか入れてもらえず、何度も仕切りなおした後にようやく境内に入ります。祭りの最後を、餅撒きで締めくくります。



広島県 呉市(旧豊町) 秋祭り ~沖友地区~

毎年9月の第1日曜日に行われる沖友地区の秋季大祭です。前日に、祭礼団員の手により組み立てられた櫓、祭礼団員と団員に肩車された櫓の乗り手の4人の子供は、地区の集会所から神社に向かいます。神社では、「宮出し(ミヤダシ)」神事が行われます。神事が終了し、「ナク」と言われる独特の囃子歌の後、櫓を境内の外に担ぎ出しお旅所へ向かいます。御輿と共に「お旅所」に到着すると、沖友地区で古くから伝わる「獅子舞」が奉納され、続いて、「青鬼の舞(アオオノマイ)」も奉納されます。「五穀豊穰」、「悪魔退散」の祈りをこめて舞われます。お旅所からの戻り道、櫓を横に回したり、御輿の進进行を妨げるような動きをします。足休めという昼休憩を挟み、午後の櫓廻しが始まります。櫓を神社の正面まで進め「宮入れ」前の最後の櫓廻しを行い、餅まきや舞の奉納も終わると「宮入れ(ミヤイレ)」の神事で幕を下ろします。地域の人口が減少する中、大人も子供もこぞって祭りを盛り上げています。



広島県 呉市(旧豊町) 櫓祭り ~御手洗地区~

毎年7月の第4土曜日に行われている御手洗地区の櫓祭りは、早朝、蝉しぐれのなか、祭礼団による櫓の組み立てから始まります。正午頃になると、若胡子屋(ワカエビスヤ)跡で、「立立ち(テダチ)」が始まります。祭礼団は行列を組み、「櫓音頭(ヤグラオンド)」を歌いながら祭りの開始を告げます。屋の櫓は、地区内のほぼ全域を練り回します。狭い路地や、急な曲がり角が続く、時折、櫓が軒先をかすめながら、担ぎ手達が息を合わせて櫓を進めて行きます。子供櫓も大人の櫓の後ろについて巡行します。「昼廻し」は、住吉神社(スミヨシジンジャ)に到着すると終了です。「夜廻し(ヨマワシ)」は櫓の動きが激しくなるので飾りが取り外され、代わりに海水で清められた笹の葉で飾り付けられます。「夜廻し」の途中、櫓は突然、地面に叩きつけられるように倒され、担ぎ手のタイミングが合わなければ、けが人の出るような激しさです。櫓の乗り手は、櫓が倒されても太鼓をたたき続けます。やがて最後の餅まきを行い観衆に感謝し、祭りはお開きとなります。



熊本県 嘉島町 熊本県重要無形民俗文化財 六嘉の獅子舞 ~水の郷・嘉島町~

嘉島町下六嘉(シモロッカ)には、昭和36年県指定重要文化財の「六嘉の獅子舞」が継承されています。毎年10月17日の六嘉神社秋の大祭に奉納され、五穀豊穰が祈願されます。六嘉の獅子舞は、まず「出端(デハ)」が舞われるが、これは出陣を表しています。次に「ツリ」と呼ばれる戦士の装束の稚児と獅子との戯れを現し、獅子はこの玉使いに操られます。それが終わると「棒使い(ボウツカイ)」が舞われます。これは子供が大きくなって戦士となり、獅子と戦う様を表しています。「モヤ」は雄獅子と雌獅子の愛情交換を描くとされ、やがて「タナ上がり」でクライマックスを迎えます。20mの柱に獅子が登り、先端に付けられた牡丹の花をもぎ取って投げます。これを捕ったものは、1年無病息災で過ごせるといわれています。大祭の翌日、世話役の庭先で「別れ獅子(ワカレジシ)」を舞って、六嘉の獅子舞を終えます。



福岡県 糸田町 糸田町の伝統芸能 金村神社の田植祭

福岡県の中央部に位置する糸田町は、古くから稲作が行われてきた所です。およそ1,300年前、大伴金村(オオトモノカナムラ)がこの地を訪れ「泌泉(タギリ)」を掘当て、この水で稲田を潤したと伝えられています。また、「イトヨキ田」から「糸田」の地名が生まれたともいわれています。田植祭は、旧暦正月15日に行われていたが近年は、3月15日に行われます。現在の田植祭は、まず「畔ざり(クログリ)」から始まり、「おかつ」の登場、次いで「牛使い」が登場して「代かき」が行われ、近隣の小学生女子による「田植舞」が奉納され、最後に若者による「田植え」が行われます。人々は稲の苗に見立てた「石菖(セキショウ)」を持ち帰り、神棚や田に飾って、五穀豊穰を祈ります。



福岡県 福津市 津屋崎祭ロマン 津屋崎祇園山笠 豊山神社御神幸祭

福津市には、1714年から継承されている「津屋崎祇園山笠」と1716年から行われている「豊山神社御神幸祭」があります。祇園山笠は津屋崎地区を三つの地区に分け、それぞれ、「北流(キタナガレ)」「新町流(シンマチナガレ)」「岡流(オカナガレ)」と称し、追い山を勇壮に担ぎ町を廻ります。その順番はくじで決められますが、経路には伝統的で複雑なしきたりがあります。「豊山神社御神幸祭」は福津市勝浦の豊山(ブザン)神社から年毛(トシモ)神社まで御輿を担ぎ、下り上る神送りの行事です。昔から伝わる大名行列がその一行に加わり、また、お旅所では獅子楽(シシガク)が奉納されます。



佐賀県 基山町 ドンキャンキャン、伝統と感謝の祈り 荒穂神社の御神幸祭

基山町では、毎年9月23日明け方、五穀豊穰と無病息災を祈って、「荒穂神社の御神幸祭」が始まります。まず、ご神体を神輿に移し、第1回の芸能を奉納します。芸能は、災拂(サイバライ)、鉦風流(カネフリュウ)、獅子舞、白羽熊(シロハグマ)、挟箱(ハサミバコ)があります。行列は様々な役割の人々で構成され、お仮殿に到着します。お仮殿着御祭(オカリデンチャクギョサイ)の後、ここでも芸能が何回か奉納されます。やがて行列は荒穂神社に還御(カンギョ)、本殿鎮座祭(ホンデンチンザサイ)を終えて最後の芸能が奉納され、今年の実りに感謝し来年の豊作を祈りながら御神幸祭は幕を閉じます。



宮崎県 都城(旧山之口町) 霧島と共に生きて… ～山之口町に伝承される民俗芸能～

山之口町の各地域に残る民族芸能を紹介した映像です。この地区には多くの民族芸能が残されていて、歴史的な背景、踊りの請われ、踊りの装束など細部についても紹介されています。いくつかの伝統芸能は、途中で継承が途絶えましたが、保存会や有志によって復活され近年演じられるようになりました。この映像は、伝統芸能の保存継承に大いに役に立つと思われ興味深いものです。野的正八幡宮(マノショウハチマンガウ)に伝わる“浜殿下り(ハマクダリ)”から転じたといわれる“弥五郎(ヤゴロウ)どん祭り”は、養老4年隼人の乱の折、首長であった弥五郎どんが、朝廷側に敗れ、その祟りを恐れ、大人(オオヒト)人形弥五郎どんをつくり、怨霊を鎮めたのが起こりとされています。他にも、大隈町の“岩川弥五郎どん”日南市の“田之上(タノウエ)弥五郎様”などの伝承があります。



宮崎県 西米良村 神々の息吹が現在に蘇る ～西米良村に伝承される郷土芸能～

この映像は、西米良村(ニシメラソン)に継承されている伝統芸能を紹介したものです。「小川地区」には“尻振り踊り”と、毎年12月15日に近い土曜日に夜を徹して舞われる神楽三十三番が伝えられています。また、「竹原地区(タケハラチク)」には、“仲間米(ナカマゴメ)”と呼ばれる共同一致田が昭和の24年ごろまで続けられ、そこで生まれた歌や踊りが“団七踊り(ダンシチオドリ)”(15番の演目がある)と“桃と桜”です。2番の演目があります。「越野尾(コシノオ)地区」の児原(コバル)稲荷神社には12月8日の例大祭に、神々を招請し神饌(シンセン)を献じ、神楽三十三番が夜を徹して奉納されます。成就神楽を舞う頃には、夜が白々と明けます。



宮崎県 高千穂町 よみがえる、ふるさとの奏べ ～本組地区に伝承される、ばんば踊り～

宮崎県高千穂町は、神々が降臨された地として有名ですが、中西(ナカニシ)地区と本組(モトグミ)地区で毎年8月14又は15日にお盆の行事の一つとして“ばんば踊り”が行われます。地元では、廃れてしまうこの踊りを昔の形に戻そうと保存会が結成されました。山間の地では大勢で踊る場所が無く、馬の飼育場である馬場でこの踊りを行ったのが始まりとされ、“ばんば踊り”の名に変化したものです。途中で“棒打ち”のような演目が入るのが特徴的です。本組地区には、「鬼の目はしらかし」の行事が旧正月に行われます。天高く舞上がる炎に鬼は恐れを抱き、退散するとこの言い伝えがあります。竹で組み上げられた櫓に火が付けられ、人々はこの竹を叩き割り、この“音”が鬼を退散させ、己の煩惱を追い払うと伝えられています。



宮崎県 宮崎市(旧高岡町) 高岡町の伝統芸能 受け継がれる、先人たちの息吹「城攻め踊り」

“城攻め踊り”について、一説には島津義弘(シマズヨシヒロ)が、やはり病の平癒や士気の鼓舞を願って、敦賀の念仏踊りを元に始めさせたといわれています。昭和42年頃には一旦途絶えましたが、平成6年に浦之名(ウラノミヨウ)小学校の生徒にこれを教えることにより復活しました。毎年、秋の運動会と町の産業文化祭に踊りが披露されています。高岡町には他にもいくつかの伝統芸能が伝承されており、次のものが映像として記録されています。穆佐(ムカサ)地区「穆佐小学校儀踊り」、田之平地区(タノヒラチク)「田之平バラスデコ踊り」、深水(フカミズ)地区「深水剣舞」、高浜地区(タカハマチク)「高浜小臼太鼓(コウスデコ)踊り」、上倉地区(カミクラチク)「上倉儀踊り(カミクラタワラオドリ)」、下倉地区(シモクラチク)「下倉栗野神社お田植え神楽(シモクラアワノジンジャオタウエカグラ)」です。



宮崎県 串間市 もぐらもちと柱松 ～宮崎県串間市の年中行事～

串間市には、広野地区(ヒロノチク)に伝えられる「もぐらもち」と市木地区(イチキチク)で行われている「柱松」の二つの年中行事があります。「もぐらもち」は寛永年間、約300年前から伝承されてきた珍しい行事です。旧暦の8月15夜に行われ、独特の衣装を付けた“めごすり”と子供たちの“打ち子”が“わらつと”を持って各家を廻り、地面を打ちたたきます。各家を廻り終えると、皆で綱引きを行い終了となります。五穀豊穡、無病息災を願う行事とされています。「柱松」は、昔この地方で暴れていた龍の口に火を投げ込んで退治したといういわれがあるようですが、長い柱の上部に“巢”と呼ぶかごを取り付け、これをめがけて下から火のついた松明(タイマツ)を投げ入れる行事です。五穀豊穡、無病息災を願いとして毎年行われ、かごに火が入り燃え上がると終了となります。



宮崎県 木城町 薫り高き文化に抱かれて ～木城町に伝承される郷土芸能～

この地方は、8月の中旬をお盆としている家が多く、「比木の盆踊り(ヒキノボンオドリ)」は、お盆の行事の一つとして、地元の婦人会を中心とする保存会により継承されています。盆踊りは13～14日(主に14日)の夜、初盆の家々の庭先で先祖の供養のために踊られます。集団の慰霊行為が習俗化したものといわれています。踊りの演目は“よったげ”“豊年踊り(ホウネンオドリ)”“手踊り(テオドリ)”“兵語(ヒョウゴ)”“地踊り(チオドリ)”の5つで構成されています。「中之又神楽(ナカノマタカグラ)」は毎年12月の第2の土日、寒い時期に33番の神楽が夜を徹して舞われます。その歴史は200年とも400年とも言われ、神社に保管されている“神楽問答集”に細かく神楽が記載されています。「舞殿(マイデン)」が神社の隣の地面に畳を敷いて作られるのは珍しく、この神楽は“神体(シンタイ)出現”の神楽といわれ、第15番“荒神舞(コウジンマイ)”では、“神体”と“神主”の問答が入り特徴的です。



宮崎県 都城(旧高城町) 高城町に息づく郷土芸能 一古代とロマンの里に舞う一

有水地区(アリミズチク)の「鉦踊り(カネオドリ)」は、当時この地方を治めていた有水備前守(アリミズビゼンカミ)が戦死をとげた頃、この地は稲虫の害で凶作にも見舞われました。そこで有水備前守の供養と豊作を祈願してこの鉦踊りを始めたといわれています。親鉦(オヤカネ)、中鉦(ナカカネ)、小鉦(コカネ)各一名と矢旗(ヤハタ)(太鼓)九名で構成されます。現在は保存会により伝承および後継者育成として小学生、中学生の指導に積極的に取り組んでいます。石山地区の「花相撲」は、1841年にそれまで決壊の多かった定満池(ジョウマンノイケ)の堤防が改修されたことを祝って、水神様を建立すると共に、奉納大相撲を行ったのが由来とされています。毎年8月の最終日曜日に行われ、この地区の祭りの呼び物となっています。そのほか桜木地区(サクラギチク)の「桜木儀踊り」、星原地区(ホシハラチク)の「星原奴踊り」、香禅寺地区(コウゼンジチク)の「香禅寺奴踊り」、横手・原中地区の「横原奴踊り」、穂満坊地区(ホマンボウチク)の「穂満坊三月十日踊り(ホマンボウサンガツトオカオドリ)」、大井手地区(オオイデチク)の「イヨブシ傘踊り」が紹介されています。



鹿児島県 かもうちょう 蒲生町 れきし ふるさとの歴史をたずねて かもうつた 蒲生に伝わる きょうどげいのう 郷土芸能 ふるさとあすつむひとびと ～故郷を明日へ紡ぐ人々～

蒲生町にはいくつかの伝統芸能が伝えられていますが、どれもが島津義弘公に関わるものと伝えられています。川東、北、下久徳地区には「太鼓踊り（タイコドリ）」が保存会により伝えられています。8月21日、蒲生八幡神社（ガモウハチマジンジャ）に奉納されます。「太鼓踊り」は、「ホタ振り」、「太鼓打ち」「鉦打ち」の3つの役があり、それぞれ装束も異なります。漆地区には、「漆バラ踊り（ウルシバラドリ）」が保存会により継承されています。「漆バラ踊り」の役柄は、「ドラ打ち」「女形（オンナガタ）」「鉦打ち（カネウチ）」「バラ打ち」の4つです。「道行（ミチユキ）」「門掛かり（カドカカリ）」「ビナマキ」「ビナホドキ」などの演目が紹介されています。米丸地区（ヨネマルチク）には、「米丸兵児踊り（ヨネマルヘコドリ）」は伝えられています。朝鮮の役で功の在った地区の交流を深め子孫に語り伝えるため、島津義弘が命じて踊らせたというものです。宮脇地区（ミヤウキチク）、西浦地区（ニシウラチク）、久末地区（ヒサスエチク）には勇壮な「棒踊り」が伝えられており、紹介されています。また、久末地区には、女性のみで舞う「久末田の神舞（ヒサスエタノカミマイ）」があります。



鹿児島県 さつませんだいし 薩摩川内市（旧祁答院町） けどういんちやう 祁答院町の きょうどげいのう 郷土芸能 じだいひつぶんかいさん ～次代へ引き継ぐ文化遺産～

上手地区には「上手（カミデ）太鼓踊り」が、毎年10月8日の豊日曇（トヨヒルメ）神社例大祭に奉納されます。起源は、朝鮮出兵から帰国した、島津義弘公が推奨したものと言われています。「鉦打ち」「カラ太鼓打ち」「ヒラ太鼓打ち」で構成され、演目は「二段」「三段」「ビナマキ」「四竿（シサオ）」「山田楽（ヤマデンガク）」などがあります。馬頃尾地区（マコロベチク）には10月12日に南方神社例大祭（ミナミカタジンジャレイタイサイ）で奉納される「馬頃尾太鼓踊り」、川東地区（カウヒガシチク）の「川東バラ踊り」があり、継承されています。馬頃尾太鼓踊りの構成は、上手地区と同様ですが、演目は「門楽（モンラク）」「進入（シンニュウ）」「びな巻き」「花いり」「しめ踊り」となっています。川東バラ踊りは「バラ組」「鉦組」で構成され、「大マカギ」「スツタ」「カサバイ」「タナバタ」などの演目があります。黒木地区は9月下旬から10月上旬の大楠（オオクス）神社例大祭に黒木文化少年団により「黒木鷹踊り」が奉納されます。男は「鷹役（タカヤク）」女は「江刺役（エサシヤク）」を演じます。そのほか、麓西地区の「麓西（フモトニシ）虚無僧踊り（コムソウオドリ）」、菊地田地区（キクチタチク）の「種子島踊り」などが収録されています。